

Thank you for the wonderful time!



Gyoshu
NEWS

～広報部～

Nov. 2017

PUBLISHED BY 広報部

特集：語学&生徒会

国際社会で活躍する人間を目指して

国際社会が進行し、もはや常識となった「グローバル化」。それに伴い、社会から求められる人材もインターナショナルなものへと変化しつつある。ここでは、そんな人材に必要な「語学力」に焦点を当て、外国語の弁論大会、スピーチに出場したお二人に感想と語学を身に付けるコツをインタビューした。

英語弁論大会入賞 樊 婕緋さん(中3)

●感想：スピーチをするのは緊張します。それ以前に、聞き手に話を伝えるのがとても難しいです。抑揚やアクセントなどの、言葉の聞き取りやすさに気を配ると、相手に伝えようとする気持ちを両立するのが大変でした。

●語学を身に付けるコツ：まずはその言葉に触れること。英語の本を読んだり話したりすること。特に「自分から使うこと」が大切です。

第35回全日本中国語スピーチコンテスト静岡県大会
朗読部門(中高生の部)第2位 深瀬悠介さん(中2)

●感想：出場者も多い中、中国語に「興味のある方」が多くいたことに驚き、同時に感心しました。

●語学を身に付けるコツ：

とにかく、学ぶことを「楽しむ」ことです。リラックスして学ぶことにより、さらに興味も湧いてくるので、技能も高まっていくと思います。



言葉の壁は大きい。いっそのこと作っただけ、とザメンホフが提唱した人工語であるエスペラント語も、定着には至らなかった。

今の世界、時代に適応するには英語力を鍛えなければいけない。いっそのこと自分が英語圏に生まれていれば、と考えるが、それは無理な話である。むしろ父、母の子でよかったと感じることが多い。産んでくれてありがとう。あとは日本国が過去に世界を統一していれば、とも考えるが、戦争と歴史のことを考えると、野暮な話であると思う。結果論だが、負けてよかった、とも考えている。

話はそれだが、頑張ろう英語、ということで、英語の成績が別に良いわけでもない人間が書いた記事であった。

(高1・出口、青島)

キャンベルハイスクールとの交流

9月23日から10月2日にかけて、オーストラリアの首都、キャンベラにあるキャンベルハイスクールの生徒が来日し、月曜日から日曜日の7日間、本校に通った。暁秀生はホストファミリーとしてオーストラリアの生徒たちを家に泊めたり、スクールバディーとして学校での生活を共に過ごすなどした。キャンベルハイスクールの生徒たちは2、3人ずつ各クラスに分かれ、そのクラスの生徒たちと会話をしたり、一緒にご飯を食べたりと、日本の学校生活を体験した。キャンベルハイスクールには夏に暁秀生が同じようにホームステイをし、交換留学をここ数年続けているため、交流が深い。全く違う国で育ち、違う言語を話す暁秀生とキャンベルハイスクール生だが、文化や言語の壁を乗り越えようと双方が努力し、結果的に仲を深め、最終日には別れを惜しむほどの関係になることが出来た。キャンベルハイスクールの生徒たちが帰国する日の前日に本校で行われたフェアウェルパーティー(送別会)では、言葉が通じなくて辛かった最初の方の日々を涙を流しながら語る暁秀生もいた。ホームステイを受け入れた植田愛美さん(高1)は、「家でも家族全員で英語を使う機会が増えて、勉強になりました。」と語った。このキャンベルハイスクールの生徒たちのホームステイは、両方の生徒たちにとって良い刺激になり、良い外国語の勉強にもなった。そしてなによりも、貴重な異国の友達を作る素晴らしい機会であった。

(高1・中山)

新生、生徒会発足

暁秀初の試みであった生徒会選挙によって選ばれた、生徒会長と生徒会副会長に直撃インタビュー！

◆生徒会長：花井玲美さん(高2)

Q1：なぜ生徒会長になろうと思ったのですか？

A1：不満をただの愚痴で終わらせたくなく、実行して変えたいと思ったからです。



Q2：どんな会長になりたいですか？

A2：親しみやすく、威厳を感じさせないけれど、めっちゃ仕事ができる人になりたいです。生徒会長だからといって、距離が出来てしまうのは嫌ですから。

Q3：今回の生徒会メンバーをどう思いますか？

A3：中1から高2まで男子も女子もいて、様々な良い議論や意見が生まれそうだなとワクワクしています。全員の活躍に期待です!!

Q4：暁秀をこれからどういう学校にしたいですか？

A4：無駄なものや変えるべきものを改善していき、全校生徒が充実した学校生活を送れるようにしたいです。

Q5：今後、やっていきたい活動は何ですか？

A5：まずは、委員会の整備をやっていきます。また、生徒会を中心としたボランティア活動も行ったり、あと行事も、もっと楽しめるものにしたいなあって思っています。

Q6：最後に、生徒のみんなに一言お願いします。

A6：選ばれたからには、全力で500%の力を出して、生徒会長として働くので、ご協力お願い致します!!

◆生徒会副会長：山本柚寿さん(中2)

Q1：なぜ生徒会副会長になろうと思ったのですか？

A1：私は人間関係でつまづいてしまい、学校にも部活にも行きたくない時期がありました。そんな時、ある先輩方



が生徒会を進めてくれました。周りの環境も自分自身もかえるチャンスだと思い、立候補しました。

1歩踏み出す勇気をくれた先輩方には言葉で表せないほど感謝しています。

Q2：どんな副会長になりたいですか？

A2：生徒にとって身近な副会長になりたいです。気楽に声をかけてもらえるような存在になりたいです。

Q3：今、不安に思っていることはありますか？

A3：特にありません。会長をはじめとする先輩方が生徒会を引っ張ってくれているので、とても心強いです。

Q4：暁秀をどんな学校にしたいですか？

A4：私はこの学校を常に新しいことを取り入れている学校だと思います。いち早くIBを取り入れたり、ロー



ソンを導入したり。なので私は「常に進化する暁秀」を目指したいと思っています。

Q5：今後、やっていきたい活動は何ですか？

A5：立会演説会でも言いましたが、部活動システムの導入や、暁秀祭の改善、その他生徒の意見を取り入れ、「進化する暁秀」にするための活動を行って行きたいです。今後とも生徒会への協力、そして応援をよろしくお願い致します。

(高2・長田)



vol.3

毎度おなじみ G-studio! 今回のゲストは元中学テニス部の齋藤優承君と岩藤誠君(中3)。市内大会をはじめ、数々の大会で優勝に輝いた彼らの、強さの秘訣に迫った。



「とにかく、面白かった」と語るのは、岩藤君。まだ出会ったばかりの頃、齋藤君の肌の白さに驚いたそう。

クラスが同じで、普段からも仲がいい。そんな2人がペアを組んだのは、中1の時。ペア替えもあったが、最終的にはこの2人になった。

「一緒にやって、楽しかった」と齋藤君。「楽しいけど、ふざけすぎない。たとえ負けそうになっても、あきらめない。僕たちは2人とも『勝ちたい』って思っていたから。」

「いいペアだった」そう言い切る彼らは、互いへの信頼の念と、自信に溢れていた。

そんな彼らの強さの秘訣は、何だったのだろう。

「話し合いは、試合中に」試合中に思ったことや言いたいことは、すべて試合中に話したという。

「その後は、それぞれ個人練習」他校の先生からアドバイスを受けたり、上手な選手のプレーを研究したり。彼らは、日頃の鍛錬を怠らなかった。

時には、プレーが合わないこともあったとか。「でも、それは試合中に話せるから。話した後は、切り替えができたし、自信をつけることもできた」と。しかし彼らには、もっと大切なことがあった。齋藤君は言う。「僕たちは何より、部活の仲間に恵まれていた。」2人を含めた、16人の仲間。全員同い年で、中学からテニスを始めた。「いつも誰かが反論して、ゴタゴタもいっぱいあって。でもそのたびに団結力が高まって、より強くなれた。」岩藤君は、どこか楽しそうに話してくれた。

彼らにとって忘れられないのは、中学最後の中体連。市内大会の団体戦でのこと。最終セットでマッチポイントを決められ、追い詰められていた暁秀テニス部。それは、県大会進出をかけた決勝戦だった。「こんなところで終わるなんて嫌だ。本気でそう思った」と齋藤君。「負けたくない。どうか勝たせてくれって、祈るような気持ちだった。」コートで苦戦を強いられる仲間。齋藤君、岩藤君を含め、応援する側も必死だったという。しかし誰1人、決してあきらめようとはしなかった。仲間は粘りに粘って、ついに同点にまで追いついた。そして仲間は、最終ポイントを決めた。暁秀テニス部は、逆転優勝したのだ。「すごく興奮した! 嬉しかったし、誇らしかったし、本当に感動した。もう、絶対に忘れられない。」そう話す2人も、興奮冷めやらぬ様子だった。

「仲間がいたから、ここまでこれた。僕たちは、一緒に強くなった。」

彼らが部活をするうえで、大切にしていたこと。岩藤君の答えは、「円陣と応援」。「目標を一つに、気持ちを一つにすること。『勝つ』っていう目標があったから。」

齋藤君には、後輩たちに伝えたいことがあるという。それは、「自分を過信しすぎないこと」。「自信をもつことは大切だけど、過信しすぎないで。後輩たちにも頑張ってもらいたい。」

2人は今後どうするのか。本人たち曰く、「全然決めてない」とのこと。「テニスはもちろん好き。だけど高校生になれば、やるべきことも増えるだろうから。まだまだ考え中。」



数々の大会を制覇した、齋藤・岩藤ペア。彼らの勝利の裏には、日々の練習に裏打ちされた強さと、仲間への厚い信頼があった。彼らの姿勢から、私たちが学べることは多いだろう。2人のますますの活躍に期待したい。

(中3・戸田)

中体連を振り返って…

サッカー部

暁秀といえばサッカー部、サッカー部といえば暁秀。そして、暁秀のサッカー部に弱いという印象を持っている人はいないのではないか。

中体連の結果は市内優勝。強さの秘訣をキャプテン、川村章馬さんに聞くと、「生山先生に厳しいことや苦しいことをたくさん言われたけど、そのおかげで今のチームがあると思うし、この結果にたどり着けたと思う。後輩たちには、人数は少ないけど、自分たちらしいプレーをしてほしい。」と話してくれた。休むことなく練習に励み、努力し続けてきたサッカー部をこれからも応援していきたい。

バトミントン部

バトミントン部は暁秀中学の運動部の中で一番の部員数を誇る部活である。男女ともに人気のあるバドミントン。中体連の結果は男子準優勝、女子優勝だった。部長の田保日向鈴さんに話を聞くと、みんな楽しそうにしていたとチームの雰囲気話を話してくれた。この試合での後悔はないようで、「また表彰されてください。」と後輩へのメッセージを楽しそうに語っていた。新キャプテン、関いおんさんを中心にこれからも頑張ってもらいたい。

女子バスケットボール部

女子バスケットボール部は、部員数7人という少ない人数の中、中体連を迎えた。危なげなく1回戦を勝ち上がった暁秀は、2回戦で、県1位である市立沼津中等部と対戦した。対戦するのは三度目で、過去二度は大差をつけられ、敗北。去年の中体連も市立沼津と対戦し、惨敗した。その雪辱を果たすため、試合に挑んだが、結果は104対14で敗北。しかし、元キャプテン金澤邑香さんは、「不思議と後悔はしていない。チーム一丸となって市立から奪い取った14点は大きな成果だった。」と語った。確かに前回より9点も点が伸びた。今年度になり顧問が変わり、完全に今までと変わった練習。そのきつく厳しい指導がこの14点に繋がったのだろう。ミニバス経験者、秋山あみさん率いる新チームの目標は「県大会出場」。市立沼津中等部をも抑え目標のコートに立てるのか、期待は高まる。

男子バスケットボール部

男子バスケットボール部は全校集会でも度々表彰され、新人戦準優勝、会長杯県東部ベスト16など、数々の実績をあげている。しかし、中体連ではまさかの初戦敗退。バスケットボール部元キャプテンであり、エースでもあった稲葉光哉さんに話を聞くと、「悔しい。悔しいしかない試合だった。来年は後悔のない試合をしてほしい。」と語っていた。

そして男子バスケット部といえば、顧問である浅倉先生。印象を聞くと、「情熱的で、選手やチームのことを一番に考えてくれる真面目な先生。」と、選手に慕われている先生であることがわかる。

新チームを率いるのは、上級生に混じってレギュラーとして活躍していた山田朋樹さん。年々レベルアップしてゆく男子バスケット部から目が離せません。



男子テニス部

男子テニス部といえば無敵。市内で彼らを倒せるものはおらず、全ての市内大会で団体戦優勝、個人戦上位は暁秀が独占。中体連でも期待通り団体戦優勝、個人戦1位、2位、3位独占。危なげなく県大会に駒を進めたテニス部は、県1回戦、長田西中学校と対戦し、圧勝した。続く2回戦は富士宮第二中学校と対戦。粘りを見せたが、3-0で敗北した。

新チームキャプテンはチームのムードメーカー高嶋拓実さん。新人戦にも注目だ。

女子テニス部

女子運動部の花形、テニス部。そんなテニス部の部長である内村明子さんに中体連での様子をインタビューした。結果は惜しくも初戦敗退。勝利を手にするにはできなかった。納得のいく結果にはならなかったようだが、その思いを後輩に託し、部員へのメッセージを熱く語った。「練習は決して裏切りません。一球一球を大切に、メンタル、体力共に成長し、県大会を目指してください。」と。この思いは後輩へと受け継がれ、来年の中体連への期待が高まる。

水泳部

部員はなんと一人だが、中体連の種目として水泳の大会に参加したのが高野航史さん(中1)である。結果は200m バタフライ4位、100m バタフライ7位、初めての中学の大会で緊張していたようだが、新人戦への決意を新たに切り替えて頑張っていきたいと元気よく話してくれた。新人戦での結果にも期待だ。

(中2・山本)

